別府市長賞

誰もが生きやすい世の中へ

別府市立北部中学校三年　安森　咲恵

私にはAちゃんという友達がいる。Aちゃんは生まれつき複数の障がいがある。とても体が小さく、指が二・三本ずつしかない。そして知的障がいがある。そのためAちゃんと話すことはできなかったがAちゃんは私を見つけると笑ってくれた。私はそんなAちゃんが大好きだ。

ある日、Aちゃんのお母さんとAちゃんと公園で遊んでいると、車イスにのっていたAちゃんの前を男の子とそのお母さんが通った。すると男の子は指を差しながら

「あの子変なのー。指も少ないし、気持ちわるいー。」

と言い、その男の子のお母さんも

「あんまり見ちゃだめよ!、いつ暴れだすか分かんないんだから。」

と言った。私はそれを聞いたとき頭が真っ白になった。そして涙がでてきた。すぐにAちゃんのもとに走ってかけよった。泣いてる私をなぐさめながら、Aちゃんのお母さんはAちゃんに

「ごめんね。きちんとした体に産んであげられなくて。」

と謝っていた。それを聞いて私は悔しかった。だだ公園にいただけのAちゃんがなんでそんな心無い言葉を浴びせられなくてはいけないのか。こんなにも優しくAちゃん想いのお母さんが謝らなければならないのか。泣き続ける私を見て悲しそうな顔をしたAちゃんの顔が私は今でも忘れられない。

またつい先日のことだ。電車にのっていると車イスの男性がのってきた。少し電車は混んでいたので車イスの分、少し詰めなければならなかった。すると一人の男性が

「場所取って邪魔なんだよ。」

と言った。すると、車イスの男性は驚いた顔をしてあのときAちゃんが浮かべた悲しそうな顔になった。そして次の駅で降りていった。Aちゃんのときのように車イスの男性は電車にのっていただけだった。なぜ私たちとなにも変わりない生活を送っているだけの人が傷つかないといけないのだろう。私たちとAちゃんや車イスの男性とでは何が違うのだろうか。Aちゃんは言葉を上手く話すことが苦手だ。私は絵を描くことが苦手だ。車イスの男性は歩くことが苦手だ。私はダンスが苦手だ。これらに違いがあるのだろうか。全てが完璧な人間なんていない。違いがあるからこその人間だ。その違いを補い合えるのが人間だ。人間は一人で生きていくことなんてできない。だからお互いの違いを認め合い助け合うことが大切なのだ。

Aちゃんや車イスの男性に心無い言葉を浴びせた人たちは目に見えた明確な自分たちとの違いを受け入れることができなかったのだと思う。ただ知っていてほしい。相手も同じ人間だということ、その人を大切に思う人がいるということを。

言葉は大きな力を持つ。それは使い方によっては凶器となる。しかし使い方次第では、一言で人を笑顔にする力を持つ。言葉の力を知り自分の発言に責任を持ってほしい。言葉は取り消せない。取り消せないのなら優しく温かい言葉を使ってほしい。それが誰もが生きやすい明るく美しい未来への一歩だと私は思う。